
BlueStone

空魚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BlueStone

【Nコード】

N0472E

【作者名】

空魚

【あらすじ】

舞台は一千年後の地球。天変地異のために大地を失った人々は生活の基盤を空に移した。飛行技師の少女は、地上へ戻ろうと活動する母親とそれを阻止しようとする『箱舟』の管理者との争いに、否応なしに巻き込まれてゆく。

「1」

『記憶は空にある。音楽はその響きによって空気に溶け込んだ記憶を蘇らせるからこそ美しい。空に触れる翼を心に持つ者は、それ故に全てを知る可能性を持っている』

中世の詩人クライ・ハンギングの言葉

プロローグ

大地を覆う草は、つい今し方芽吹いたようなエメラルドグリーンに輝いていた。その1枚1枚の葉は重い露を湛え、1人の少年の姿を映し出している。転がるようにして駆けてくるその姿は真剣であるがゆえに滑稽にすら見えた。

大地を覆う植物の初々しさとは裏腹に、少年のソバカスだらけの顔は恐怖に歪んでいる。

「待てっ」

やわ草を踏み散らしながら、複数の荒々しい靴音。少年は胸に抱えた古ぼけた書物を一層きつく抱き締めた。

「待つもんかつ！」

背の低い赤毛の少年は、そう吐き捨てつつも自分の体力の限界を悟って齒軋りをした。心臓があぶり、やけに近くから自分の心音が聞こえてくる。

「！」

幾分もしないうちに、少年はドウツと大地に倒れ込んだ。数日間に及ぶ追いかけっこによるあまりの疲労のためだった。

「クソおっ……ごめん、デボーテのおっちゃん……」

土の匂いが草いきれがグツと肺に流れ込んできて、少年はこんな

ときだというのにひどく懐かしい心地がした。今更ながらに昔よく作った草の毘の事が思い出される。

「さあ、その書物を渡せ」

乱暴に胸倉をつかまれた瞬間、少年は頭から血の気が引くのを感じた。精神が暗闇に吸い込まれる。緊張の解放は彼の意識までも飛ばしてしまったのだった。

「フン、気を失ったか」

少年を捕らえた人物は独りごちると、小さな溜め息を1つ吐いてから普段のきびきびとした態度に戻った。

「デボーテという者を捜せ。発見した者には特別手当を出そう」

仲間の鬨の声を背に受けながら、まだ年若い女は空を仰いだ。

一章 届け物

パチンと懐中時計の蓋を開けて、栗毛の少女は時間を確認した。

「もう下牡羊の時間（午後4時）か」

胸ポケットに時計を落とし込み、顔に飛んだ潤滑油を手でぬぐい取ると、少女は大きく背伸びした。朝から整備を続けていた、ハンググライダーのようにも見えるオルソニプター（羽ばたき飛行具）は、未だ様々な作業が残っている。

「ラピスううう、全然終わってないじゃんか」

機体の翼部分に張った布の緩みを調整する少女の足元に、1匹の黒猫が擦り寄る。鼻から額、額から耳にかけての曲線が優美な猫だった。ビロードのような短く生えそった体毛は見るだけで触れたくなるほどに柔らかでしなやかそうな光沢を持ち、瞳は明るい満月を思い起こさせるほどに透き通るような金褐色で、それはちょうど飴色のトルマリンを両目にはめ込んだようだった。

ラピスと呼ばれた少女は黒猫を足で追い払うと、今度は翼の蝶番のところにグリスを塗り付ける作業にかかった。彼女が動いたびに、

高く結い上げた2掴み程の長さの髪がリスの尻尾のように勢いよく撥ねる。

「だったらトルマリン、あんた手伝ってくれる？」

黒猫トルマリンはラピスの返事にピンと張った針金のような髭を垂らした。

「でも……」

「ほら、また邪魔してる」

白銀の光沢を持つ骨組みの点検を始めたラピスに、トルマリンは黄色の艶やかな瞳をキヨロンとさせて言った。

「お客さんが来てるんだけど……」

猫は申し訳なさそうに眉を寄せた。ラピスはその言葉の意味を理解すると、黒く汚れた顔をパツと上げた。

「それを早く言つてよ！」

深い青の瞳でトルマリンをちょっと睨みつけると、ラピスは手についたオイルを元は空色だった黒ずんだデニム地の作業服で拭い、作業場と住居の境目にある扉を開けた。

「ラピス〃C〃ラズリさんですね？」

モイロペリカンはクチバシについた袋を震わせながらそう言うのと、肩にかけて荷物の中から小包を取り出して機械油の匂いを身にまとった少女に手渡した。

「サイン、お願いします」

「はい」

ラピスは弁当箱ほどの大きさの包みを受け取り、郵便配達のパリカンが差し出した受領書に、一緒に貸してもらった万年筆で自分の名前を書き込んだ。

「それでは、私はこれで」

ペリカンは来たときと同じように急ぎ翼を動かし始め、そして去って行った。

「誰かな、これ」

差出人の名前は所定の位置になかった。ラピスはクラフト紙に包

またその荷物を耳元までもってきて、上下に揺すってみた。

「？音がしないわねえ」

大股でダイニングルームを通り過ぎ、その先にある自分の部屋へと移動する。

「何だろう、それ」

共に部屋に入ってきたトルマリンは堪え切れぬように問いかけた。ラピスはそれには応えず、幾何学模様の織り込であるクロスのかけられたテーブルの椅子に無造作に腰掛けた。

次いで、丁寧に包み紙を開けてゆく。

「オカリナ。見て、トルマリン。これ、母さんからだわ！」

跳びはねばかりの勢いで立ち上がるラピス。彼女は衝撃を吸収するために箱の内部に詰め込まれた紙屑を取り払うと、素焼きの笛を手にとった。

「綺麗。それにすごくいい手触り。どこの土で焼いたものなんだろう」

杖の柄の部分の形によく似たそれは、ひんやりとして手に心地よかった。さらりとした触感、青と白の釉薬で模様の描かれたオカリナはすぐにラピスのお気に入りとなった。

「ラピス、これ落ちたぞ」

ラピスが投げ出した紙製の箱の中には封筒が1通入っていたらしい。トルマリンは自分の頭の上に落ちてきたそれを口にくわえ、不服そうに差し出した。

「ごめん、トルマリン。だって、ちゃんと母さんが覚えていてくれたなんて」

一旦オカリナをテーブルの上に置き、ラピスは猫の差し出した白い封筒を受け取った。

「モルチェ＝B＝ラズリ。やっぱり母さんからだわ。何々……前略

——ラピス、元気にしてる？私は元気よ。約束どおり貴女の成人を祝い、下の大地の土を使ったオカリナを送ることにします、か」

「ラピス、俺のことは？」

トルマリンは顔を上げて光彩を細くした。

「ん？書いてあるわよ。P.S.トルマリン、あまりラピスの邪魔はしないように——」

ラピスはベッドの縁に座るとしたり顔で続けたが、トルマリンは毛を逆立ててその言葉を遮った。

「ラピス、いくら温厚な俺でも怒るぞ！」

「ごめん、ごめん、ちゃんと読むから。えっと……『トルマリンも元気にしているかしら？下の世界では未だ汚染が広がっていて、貴方の好きなカワハギやアジも海にはいません……』」

「アジ、いないのか！？」

トルマリンは悲愴な顔をして叫んだ。が、ラピスは取り合わなかった。

「続けるわよ。……海にはいません。私もBクラス（学者。ラピスの母親の場合は植物学者）の力で大地に命を吹き返そうとしているけど、なかなか種が根を下ろしてくれないの。ラピス、そのオカリナは、私と仲間の試行錯誤の結果、初めて浄化に成功した土を素材としているものよ。植物による下の大地の浄化が終わった時、また手紙を出すわ。その時まで貴女が吹くそのオカリナの音色を楽しみにしてる……」

手紙の最後の行には1年前の日付と母のサインがあった。ラピスはそれをそつと自分の指でなぞった。

「母さん、頑張ってるんだ」

ラピスは膝の上に肩肘について頭を固定し、2枚目の便せんを捲った。

「もう1枚あるけど——何も書かれてないわね？」

不思議そうに便せんを裏返して確かめるラピス。その傍らで、

「アジ、いないのかあ……」

未練がましくトルマリンが呟く。ラピスはそんな猫の背を爪先で軽くこづき、手紙を畳み直して封筒に入れた。

風車の立ち並ぶ丘は金剛石よりも強く輝く星々に照らされて、そこを渡る風の名所になっていた。風は風車の羽根に絡み付くようにして遊び、風車は吹く風の強さに応えて力強く回る。木製の歯車がギチギチと噛み合う音は風によって薄く引き伸ばされ、チェロの音のような素朴な音となって丘を越えて行く。

けれど、人影はそれらの風景には全く目もくれずに丘を横切ろうとしていた。男は闇に溶け込んでしまいそんな黒いボロ布を被り、カモシカの仲間であるらしい乗り物用の動物を自らの体の一部のように操っていた。

「ラピス」クラズリ。デボーテの一人娘……モルチェもモルチェだ。荷を送るなど、見つけると言っているようなものだ」

ラピスの父、デボーテがやっていたことはジェーダイトの3人の長老達の意志に反していた。危険は常に背後にあり、それによって彼は自分自身の命を失った。残された妻モルチェの取った軽率な行動に、他人ではあるが彼女の知人でもある男はやるせない思いがした。

「間に合えばいいが」

吐き捨てるように呟く。しかし、男の声は丘を渡る風の音によってかき消された。

「2」

オルソニプターの5つのゼンマイのネジを巻き終わり、栗色の髪の少女は防寒具を着込んで、強化ガラスをはめ込んだゴーグルを着けた。ちよつとした故障を直すための工具はオルソニプターの動力部分、つまり背中に背負う木製の箱の中に備えつけてある。防寒具の上からつけたポーチの中には整備油などの雑貨を買うためのお金と今月の生活費が入っていた。

「トルマリン、準備はいい？」

「俺、この機械に乗るの嫌いだ」

ブスリとした態度で黒猫が呟く。動力部分の木の箱の上にくくりつけられたトルマリンの姿を見て、ラピスはクスリと笑った。

「このままにしたら猫の干乾しができるわね」

「ラピスうっ！」

トルマリンの抗議の声に肩をすくめ、ラピスはオルソニプターを体に装着し始めた。空中で外れてしまえば一貫の終わりなので、ベルトは少しきつめに留める。その姿は羽を折り畳んだ天使のようにも見えた。

「トルマリン、騒ぐのもいいけど前みたいに落ちても知らないから」
この言葉に黒猫は文句を言うのをやめた。以前、トルマリンはオルソニプターから落ちかけたことがある。その時は何とか助けることができたが、それが非常に難しいことだということは猫にも分かっていた。

「……わかったよ」

素直な返事にラピスは「よし」と頷いた。

「じゃ、行くわよ」

ラピスはコクンと息を飲んで、背中の機械を持ち上げた。骨組みは粘りのあるリリユートという軽い金属で作られているため、遥か昔には300kgもあった機体は今では10kgにも満たない。

「視界良好。風向きは西南西——街とは逆の方に吹いてるわね。浮力は申し分なし、空気抵抗を計算してワイヤーはやや緩める、と」

羽根の角度を調節して、ラピスは翼を広げて風を待った。1息、2息……穏やかに吹きつけてくる柔らかい風を頬に感じる時、ラピスは自分がどこまでも広がって行くような心地がする。彼女はいつもこの瞬間、空の一部となり、大気に満ち満ちて行く至上の幸福感を味わった。

「んー、いい風……テイクオフッ！」

目の前にある切り立った崖に、少しもためらわず身を躍らす。軽い助走に髪が煽られ、トルマリンが何か言っているようだったが聞こえなかった。

「よつと」

体の側面の部分にある方向転換のためのレバーを右手で引き寄せ、風向と目的地との僅かなずれを調整しながら、左手でゼンマイが切れないように活動写真の映写機の把手のようなネジを巻き続ける。

ラピスの家は大地から解放された空高く浮かぶ島、ジェーダイトの極西に広がる草原の、これまた1番崖寄りの所にあった。が、都市部から何十m i l e も離れた辺境に住みつつ、彼女はCクラス（飛行機械の技能者）の腕前のお陰で餓死することはなかった。収入は中の上、自由時間も比較的多い整備士の仕事を、少女は結構気に入っていた。

「トルマリン、生きてる？」

問いかけに返事はなかったが、いつものことなのでラピスは別段気にも止めなかった。

「年々アーモンド型じゃなくなってるみたい」

元は綺麗なアーモンド型をしていたとされるジェーダイトの地に視線を馳せ、ラピスはそう独りごちて森に埋もれつつある東の方を目でたどった。

ジェーダイトは言わば巨大な飛空艇である。その浮力は植物による光合成と、水の電気分解に因る。本来ヘリウムガスなどの不燃性

の気体の詰まっている気嚢部分に原子の中で一番軽い水素を使うこととでかつてない浮力を得ているのだ。但し、可燃性の水素を浮力として使うことがあまりに危険なのは周知の事実である。そのため、動力部位はすべて気球内部から下に降ろされ、プラスチック装甲だった気嚢は下の大地が滅びる直前に作り出されたとされる新しい物質ファースライト（透明、ガラス光沢の鉱物。熱の伝導率が極端に低く、モース硬度10でダイヤモンドとほぼ同じ堅さを持つ）のコーティングで危険を回避していた。

「今日はまず、新しい歯車を仕入れて……」

風力発電のために使う丘の風車群の上を通過しながら、今日買う物の確認を始めたとき、それまで口を開かなかったトルマリンがひどく狼狽した様子で話しかけてきた。

「ラ、ラ、ラピスううう。あそこに何か変なものを構えてるおつちやんがいるよおおお！」

「へっ？」

「だからさあつ！あつちの、ほら、一番大きな風車のでっぺん」

ラピスはトルマリンに言われるままに前方にある風車の羽の部分に目を凝らした。ぼんやりとした人影が徐々に輪郭を現してゆく。黒ずんだぼろ布を身につけた、背の高い男である。肩にはいやに黒光りする、太い筒を乗せ……

「バズーカ砲！？」

旧式のものと思われるその砲が火を吹いたのは、ラピスが叫び声を上げた、丁度そのときだった。

拳ほどの大きさの鉄球が瞬時にして左の翼に埋まる。突風に煽られたときよりもひどい衝撃が全身を圧迫した。頭が突然ガクンと後ろに引つ張られ、脳震盪を起こしたときのように周囲が奇妙に揺れる。

「っ痛ううう……」

けれど、ラピスとて伊達に幼いころからこのオルソニプターに乗ってきた訳ではない。鳥にぶつかって翼に穴が空くことなどしょっ

ちゅうあること。落下しつつも、無事な方の翼をつまく操り、彼女は緩やかに大地に降りることに成功した。

「一体、どういうこと？」

疑問に思えど手を動かすことを怠らずに、ラピスはきつく留めたベルトの留め金を外しにかかった。追撃がなかったということは、先程の男も恐らくこちらに向かっているということだ。

「ちよつと、このベルト。こんなにきつく締めたの誰よ！」

焦りのためか、留め金はうまく外れない。完全に意識を飛ばしてしまったトルマリンを憎々しげに睨みつけ、助かった暁には1発殴つてやらないと……などという物騒なことをラピスは考えていた。

一方、少女がベルトと格闘している間に、バズーカを背負った男は着々と彼女との距離を縮めていた。彼はラピスの自宅に足向けていたのだが、途中で西の方角から飛んで来たオルソニプターに気が付き、この丘まで戻って来たのだった。

「むーっ！はずれないーつつつ」

地団駄を踏むラピスを見つけることはごく簡単なことだった。

「手伝おうか？」

「ありがとう。これ、外してくれない？」

ラピスは混乱した頭で体を締め付けているベルトを指さし、そして硬直した。

「ラピス〃C〃ラズリさんだね？」

攻撃を仕掛けて来た相手に親切に振る舞われてしまい、ラピスは何がどうなっているのか分からなくなった。

「……はっ？」

「手荒なことをしてすまない。ただ、こうでもしないと気づいてくれないと思ってね」

明るく笑う男の言葉に、ラピスはようやく正気を取り戻した。そんなことのために殺されかけたのかと思うと、呑気に惚けてなどいられない。

「それが何だつて言うのよ！よくもそんなもの撃ってくれたわね」

ようやくベルトを外し、ゴーグルを乱暴に剥がし取るとラピスは男の顔を見上げ——同時に息を呑んだ。

薄汚れた男は白い八重歯を見せながら、人懐っこい笑みを浮かべていた。金の瞳を細め、少し長目の同じ色の髪を頬にかけて。

「ん？」

しかし、少女の驚きの対象は青年の容姿ではなかった。傍らから姿を現した螺旋状の2本の角を持つオルターガゼルにこそ、焦点は絞られていた。

「この方がラピス」C「ラズリさんで？」

ガゼルは興味津々といった瞳でこちらを見つめていた。ラピスは反射的にコクリと頷き、賢そうなその動物の頬の辺りに手を差し伸べた。

「オルターガゼル……改良に改良を重ねた乗り物用生物機械の高級品だ。しかし、君には翼があるから興味はないと思っていたが」つややかな黄土色の体毛を撫でつけながら、ラピスは男の言葉は聞き流していた。

「初めまして。私はアウインと申します。ご主人様がとんだ失礼を致しまして」

アウインはラピスに毛を梳かれて気持ち良さそうに鼻を鳴らした。

「あ、あ……いえ」

丁寧に謝罪の意を述べたガゼルの仕付けの良さに舌を巻く。ラピスはそれ以上突っ掛かることをやめて、彼等の事情を聴くことにした。

「ところで、貴方達は一体……」

「俺はオリゴクレースという。身分を持たない無法者だ」

「はあ……」

曖昧な返事を返し、ラピスは首を傾げた。どこかで聞いたことがあるような気がする。

「ところでお連れさんの方は？」

「あれはいつものことだからそのうち目を覚ますと思うけど」

とは言ったものの、一旦ガゼルから離れてラピスはトルマリンの様子を見に行った。意識を手放したままの黒猫は、そのまま寝入ってしまったのか穏やかで規則正しい呼吸を繰り返している。その幸せそうな様子は、彼女に密かな殺意を抱かせるに十分なものだ。」「いつまで寝てるつもり？」

パソコンと頭をはたいて、猫の様子をしばらくの間観察する。が、トルマリンは起きなかった。寝返りを打とうとして体を固定しているロープによって阻まれ、顔をしかめる程度だ。

「ちょうどいい機会だから日光消毒しておくわ」

風に飛ばされないように金属製の杭とロープでオルソニプターを地面に固定し、ラピスはオリゴクレーヌ等の元に戻った。

「で、先に聞いておくけど、私の翼の修理代はあんたが保証してくれるの？」

オルソニプターに張る布は防水性の優れた特殊シートである。木綿や麻のように簡単に手に入れることはできない。

「それは当然。ご主人様の責任ですからね」

オリゴクレーヌが口を開く前にアウインが口を挟んだ。ラピスはこのガゼルとは気が合いそうだな、と思った。そんな彼女等の様子に、オリゴクレーヌは苦笑しつつも本題に入った。

「それはまあ、そうだな。けれどその前に、君にある場所まで同行を願いたい——と言うよりも連れて行かねばならない」

「ある場所？」

「首都セバスへ。君に関しての、いや、君の母に関しての取り調べがある。君のような調査対象の人間を捜し出して連れて行くことも俺の商売のうちの1つでね」

オリゴクレーヌの言葉に、ラピスは限りなく青く澄んだ瞳を見開いた。不安に胸の辺りがキリキリと痛む。

「母さんに何かあったの！？」

絞り取る様に叫び、少女は青年につかみ掛かった。

「モルチェが、君の両親が何に手を貸していたか知っているかい？」

「え……？」

手を貸す——その言葉の響きは奇妙な違和感を伴っていた。父が、母がそれと信じてその身を投じた事柄が、ラピスにとって悪い意味を持つはずがない。

「下の大地に緑を増やし、浄化を進めることが悪い事だとは思えないわ」

「ああ。だが、そいつが気に食わないお偉方がいてね」

胸にすがりついてきたラピスの堅く握り締められた拳を解きほぐし、オリゴレースは両親のすることを単純に良いことと信じ込んでいる少女を優しい気持ちで見下ろした。その、本人は自覚していないと見えるいじらしい様子に、オリゴレースはつかいかなくなった。

「もつとも、どっちが正しいにしても俺は俺の仕事をするのみだ」

男の言葉にカチンときて、ラピスは1度は収めた怒りを解放した。

「何よ、その言い草は。人の命がかかってるっていうのに！」

父親がどんなものなのか、ラピスは知らなかった。デボーテは夢に命を懸け、その生涯を終えた。写真で見える限りひ弱で軟弱そうな男だったが、母のモルチエがその亡き遺志を継ぐほどには魅力的な人物だったと聞く。そんな父と一言も言葉を交わせなかったことが、ラピスには悔しくて仕方がなかった。

「大体、さっきだって下手したら死んでたかも知れないのよ！」

「済みません、ラピスさん。ほら、ご主人様も謝ってください。先の言葉は言い過ぎというものです」

アウインは低く鼻を鳴らすと、オリゴレースの服の裾を口で引っ張った。

「それに関しては謝るよ」

太たく言い放つオリゴレースの自信に満ちた表情が、ラピスには気に食わなかった。

「……さっきバスへ行くって言ったわよね？分かった、ついてくでも、その前に街へ寄ってオルソニプターを直すことを優先しない

なら私は単独で首都へ行くから」

男が自分を運ぶことを商売だと割り切っている以上、この脅しは十分な力を持っていた。

「条件を飲もう。どちらにしろアウインだけでここから先を進むことはできないしな」

オリゴクレースは満足そうに頷くと、傍らのアウインの背をポンポンと軽く叩いた。

「あつちいいいいいいいい！？」

ラピスが相手の腹のうちを探るようにオリゴクレースを睨みつけていた時、その素つ頓狂な叫び声は彼女の翼のある位置から聞こえて来た。

「あぢいよおっ！ラピスう、俺を本当に日干しにするつもりか！？」
声は、必死であるがゆえにラピスのこわばった頬の肉を少しだけ弛緩させた。

「あ、トルマリン」

オルソニプターに急いで駆け寄り、ラピスは黒猫の束縛を直ちに解放した。

「あ、あれ？そういえばオルソニプターは打ち落とされて……って、もしかしてここ、天国か？」

いまだ事態をうまく把握していないトルマリンに、ようやくラピスは形のいい唇を愉快げにほころばせた。この何とも言えない間抜けな相棒がいたことで、彼女の先ほどの不安は一時的に癒されたのだった。

「バーカ、なに言ってるのよ」

黒猫の温かい体を抱き締めて、少女はハウツと溜め息を吐いた。
「ラピス、か」

胸の中で温め続けていた面影が少女のそれと重なる。少し離れた場所で彼女等を見つめる青年の瞳は、懐かしげに細められていた。
「ご主人様？」

アウインは突然無口になったオリゴクレースを不思議そうに見上

げた。青年は少し慌てた様子で「何でもない」と答え、口喧嘩しながらこちらに近づいてくる少女と黒猫とに照れ隠しのような大声で呼びかけた。

ジエーダイトは中心に皿に張った水のような湖を持つ。その周辺には様々な街があり、村があり、湖の中心にはここを統べる3人の長老が住んでいる首都セバスがあつた。

「フウウウ、さすがに厳しいわね」

ショートカットの女はその顔に刻まれた細かい皺をくつきりとさせて、警備の固いセバスの都を望遠鏡を片手に睨みつけていた。白い木綿のTシャツを着、濃い群青のジーンズを履いた30代後半ほどのいい年の女性である。

「そろそろあれはあの子に届いたかしら」

「何か悩みがありますか？モルチエ殿」

背後から現れた大柄な女に名前を呼ばれ、モルチエと呼ばれた女性性は相手の方に向いた。女は白い湯気を立てる陶製のカップを彼女に差し出すと続けた。

「……そういえば、貴殿にはお嬢さんが1人いらつしましたね」
「ええ」

じんわりと熱のこもったカップを受け取り、モルチエはコーヒーに口をつけた。

「ロサリーリース、あの子はあと2週間ほどで17になります。私は約束どおり彼女の成人の証しとしてあのオカリナをラピスに送りました」

剥き出しの岩に腰をかけると、モルチエは自嘲的に笑った。

「でも、それは長老達の目を私達の動きから逸らすため。ラピスまで利用するなんて……私、母親失格ね」

「モルチエ殿」

ロサリーリースは口をつぐんだ。肯定することも、否定すること
もできずに。

十分にローストされたコーヒーの香りは孤独の象徴であるかのよう
に、モルチェのひび割れた心に深く染み込んでいった。

「3」

二章 古びたレポート

モルチエが極西の丘にある家を出たのは丁度6年前の事だった。ラピスが11歳の誕生日を迎えたその日のことである。

チャラツ――

膝を抱え、鎖につながれた懷中時計の蓋を開けて時間を確認する。針は下天秤（午後10時）を指していた。黒猫は早々と床に就き、ガゼルも旅の疲れが出たのか、下乙女（午後9時）頃には膝を折って草地の上にその体を横たえていた。

「随分古いものを使っているんだな」

ラピスの懷中時計に目を留め、オリゴクレースはそう問いかけた。「父さんの形見よ」

一言だけ答えると、ラピスは冷たい体を持つ暖かい機械を懷にしまい込んだ。

「何かが欠けている物が好きなの。完全な物よりずっと」

焚き火の照り返しを顔に受けながら、ラピスは空を仰いだ。

「星も好き。ジェーダイトは年がら年中動いているから毎日空の様子が違うもの」

強い光を放つ青白い星。それよりも弱い光の赤い星。目の奥に染みとおって行くようなそんな、無気質な美しさ。

「世界が愛しいの」

言葉は流れる様に口から滑り出た。

「――悟りでも開いたらどうだ？」

オリゴクレースがそれをからかう。

「ふんっ。もういいわよ」

ラピスは空から視線を落とすと、オリゴクレースの視線から逃げるようにそっぽを向いた。

「人が折角、歩み寄ろうとしてあげたのに」

ぶつぶつと文句を言い、ラピスは防寒服の襟首を立てて背を向けた。

「それはどうもありがとう」

おかしそうに笑う男の態度にすっかり腹を立て、ラピスはそれ以上オリゴクレースと話すまいとしっかり口を閉ざした。

「それはそうとラピス、君は下の大地のことについてどれだけ知っている？」

話題の転換はラピスの心を引いた。けれど、彼女は耳だけ傾けるに止めた。

「それによってセバスの連中は態度を変える。君は万能の書の在かを母親から聞かされてはいないか？」

「万能の書？」

口を開いた瞬間しまったと思ったが、ラピスはやむなく体の向きを変えた。

「いや、知らないならその方がいい」

「……母さんは一体何をしたの？」

今までで1番大きな疑問が口をつく。その問を、出会ったときにも口にしたが、うまくはぐらかされたままだった。

「詳しいことは教えられない。地上を浄化しようとしたことが災いになったとしか。君にはまだ決心ができていないからな」

オリゴクレースは薪を1本炎の中に投じると瞳を軽く伏せた。それは、これ以上の問いかけには答えないという明らかな拒絶だった。

「……そう」

ラピスは再び空を仰いだ。夜の静寂を取り戻した草原に、父の懐中時計が正確に時を刻みつけてゆく――

ラピスが家を出てから2日経っていた。穴の空いた箇所を臨時に修理するのに手間取ったためである。

「あいつ、場所分かるかな？」

風圧に逆らいながら背中の中、トルマリリンが問いかける。ラピスは「さあね」と答え、長方形の屋上に緑の染料で抽象的な図柄の描かれた家をゴージェルごしに探した。

「あーった。……まったくもう。デイクソンおじさん、まだ見やすい図柄にしてくれてない」

オルソニプターのような飛行機を使って移動する人のために、大抵の街の家々の屋上は平らに造られている。特に工具店などは独自の模様を屋上に描くことで客に自分の店をアピールするのが普通だ。「……風向きが変わってる。尾翼を閉じるレバーは、と」

出力を押さえるためにゼンマイのバネの動きを止め、ラピスは着陸地と翼との間に挟まれて巻き起こる風を上手に利用して、最後の羽ばたきとともに緩やかに屋根に舞い降りた。

「……………ふうっ」

軽い目眩を克服して、オルソニプターの動力部の箱からトルマリリンを解放する。

「フミュウウウウ」

ぐったりとした様子の猫に思わず笑みをこぼしながら、ラピスはトルマリリンの首筋をつかむとその体を抱き上げ、そのまま屋根にある出入り口から下に降りていった。

「デイクソンおじさん。いるー？」

定例どおり、ラピスは下の階に向かって店主に呼びかけた。

「おおっ、ラピスカ。良いところに来た。ちよいと手伝ってくれんか？」

下の階から聞こえてきた声に従い、ラピスは地下へと降りていった。

「デクソンのおっちゃん、また変な物造ってんじゃないか？」

トルマリリンは未だ首を項垂れたまま、呻くようにして言った。ラピスは心の中でそれに同意しながら、階段脇に積み上げられている大量の書物やレポート用紙やらの山を崩さないよう慎重に歩を進めた。

「いらつしゃい。早速だがここのボルトを締めてくれんか？わしでは手が届かなくての」

言葉とともに、顔や衣服を機械油で汚した壮年の男が、脱穀機のような見上げるほどに大きな機械の中からひよろりと現れる。伸びるに任せた髭や頭髮は、獅子の鬣のように勝手気ままな向きに癖がついていた。

「おじさん、悪いけど今日はそれどころじゃないの」

「そう言わんと……そうそう、よいエンジンが手に入ったんじゃが、そろそろジェット式の機体に変えんか？」

デイクソンはニカリと笑いながら、足の踏み場もなく散らかされた部屋の、机と思しき台の上に腰を下ろした。そして既に一杯になっている灰皿の中からチビたタバコを1つ選ぶと、ズボンのポケットから潰れたマッチ箱を取り出し、それに火をつけた。

「いつも言ってると思うけど、ジェット式の機体なんか後免よ。私は歯車のかみ合う振動が好きなんだから……って、今はそれどころじゃないんだってば——母さんが何かしたらしくて、私も変な奴に追われてる。そのうちここにも来るかもしれないの」

ラピスとデイクソンとは、もう10年来の昔なじみである。彼女にオルソニプターの設計や整備の仕方を教えてくれたのは、ほかならぬ彼だった。

「……何？」

ラピスの言葉を聞きとがめ、デイクソンはタバコの火を消すと考え込むかのように栗色の頭を撫で上げた。

「私、セバスに行くわ。母さんが心配だから。でも、それに関して人にとにかく指図はされたくない。だから——」

「追っ手の足止めをしろ、と言うのじゃな？」

デイクソンの言葉に頷き、ラピスは腕の中のトルマリンを床に降ろした。

「髪はブロンド、眼もそれに近いような色してる。背は結構高くて、汚い風貌で全然格好よくないのにどこか雰囲気がある男よ。名

前はオリリ——何とか。年は25、6歳くらいだと思う」

手早く特徴を説明し、ラピスは様々な工具で埋め尽くされている部屋の物色を始めた。

「それと……おじさん、トルマリンを預かってくれないかな？」

携帯用の防水スプレーをガラクタの山から捜し出し、それをズボンのポケットに押し込みながらラピスは続けた。

「正直言つて邪魔なのよね。トルマリンがいると」

突き放すような言葉に、黒猫は毛を逆立てて目をむいた。

「ラピスうつ、君がそんなこと言うとは思わなかったよ！」

トルマリンは憤慨とやるせなさの混ざった声で叫んだ。ラピスはそれを全く無視して、元来た階段を登り始めた。

「ラピス……待ちなさい」

気まずさを抱きつつ、ラピスは一旦足を止めた。

「……何？おじさん」

「これを持って行きなさい」

少女の予想に反して、咎め事はなかった。デイクソンは書物の山から1束のレポートを選び出し、埃を払ってからそれをラピスに渡した。

「セバスに行く前に読んでおくといい」

「これは？」

「読めば分かる。さ、急ぎなさい」

ラピスは釈然としない面持ちでレポートを受け取り、2つに折り畳んでズボンのベルトに挟んだ。

「……ありがとう。おじさん、トルマリンのこと頼むわね」

ふてくされてしまったトルマリンをチラリと盗み見て、ラピスは小さな溜め息をついた。

「ああ。モルチェによろしくな」

無言で頷き、ラピスは再び階段を上り始めた。

「ラピスの奴……」

黒猫はいじけたように金属の切れ端を蹴飛ばして八つ当たりをし

ていた。デイクソンは少女の姿がすっかりと消えてしまってから、そんなトルマリンを優しく諭した。

「ラピスはお前の身を案じたんだよ、トルマリン」

はつとして顔を上げる黒猫。デイクソンは、トルマリンの金褐色の瞳に浮かんでいる感情を読み取って、そつとその小さな体を抱き上げた。

「お前の気持ちもわからんでもないがな」

機械油の懐かしい匂いに包まれて、トルマリンは胸に凝り固まった行き場のない嬉しさと怒りとに、つまらなさそうに口を尖らせた。

数日分の携帯食料と幾種類かの薬草を買い込むと、ラピスは1度家に戻ることにした。そのままセバスに行ってもよかったのだが、家に取り戻りたいものがあつた。

「あの手紙……」

白紙の便箋が脳裏をよぎる。

「急がなきゃ」

ラピスは翼を折り畳むために一杯に絞ったワイヤーを緩め、歯車の動きを止めるためのストッパーを外した。機体に命が吹き込まれる。

「それにしても……トルマリンの奴、言いたいこと言ってくれちゃつてさ」

カラクリのバネが動く細かな振動が背中に伝わってくる。猫のいない機体はやけに軽かった。

「……」

オルソニプターが羽ばたきを開始する。ラピスは雑念を振り払うように目を閉じた。そして次の瞬間、パチリと眼を開けてゴーグルを額の上からずり降ろした。

「デイクオフ」

翼の動きがスムーズになってきたところで、ラピスは食品店の屋根から飛び降りた。突如体にかかる重力。けれど、それを断ち切る

ようにオルソニプターの羽根は力強く弧を描いた。食品店の前の通りに面して造られた見世棚の近くにいた客が、一斉に散らばる。

「ゴメンっ」

大声で叫びながら、ラピスは風に乗った。懷から懷中時計を取り出し、太陽の方向と針の位置から家の方角を導き出す。

「そういえばデイクソンおじさん、何をくれたんだろう?」

ネジをきつちりと巻き、風の道に機体に乗ったことを確認してから、ラピスはふとデイクソンからもらったレポートのことが気になり始めた。

「見てみよつと」

ベルトに挟み込んだ紙の束を取り出す。ラピスはタバコのヤニで黄ばんだレポートの、最初のページに書かれているタイトルを口にした。

「『回復の兆候』地球、その浄化能力』」

そして、その1枚目の紙の右下の隅に書かれていた癖のあるサインも。

「デボーテ B ラズリ……父さんの論文?」

走り書きの汚い文字。風に煽られながらも、ラピスはその1文字1文字を噛み締めるようにして読んだ。

「『——地球は四度目の誕生を望んでいた——』」

それは30年ほど前の論文だった。厚さは1センチ以上にも及び、ほとんどカレー粉色に染まっていた。

過去、地球は3度誕生を経験したと推測される。1度目はビッグバン、2度目は氷河期、3度目——これが今回の地球の浄化作用にあたる——は世界中の火山の一斉活動である。およそ千年前に起こった突然の噴火活動は、大地を急激に熱した。その結果温暖化は極端に進み、地球最北部と最南部にあったと思われる凍結の島々が融解し、海面が上昇した。これにより、世界各地の主要都市は水没。不測の事態に、地上の人類及び哺乳類を端とするそれまでの生態系

はことごとく破壊された。

「ことごとく……破壊された？」

移り行く風景を目の端に捕らえながら、ラピスはさらに先を読み進めた。耳元で風のうなる音が、追いかけるようにこだます。

だが、地球の寿命を察知し、地上の難から逃れるべく巨大な空中城塞を作り出した3人の科学者がいた。言うまでもなく、それはジェーダイトを束ねる3人の長、サーペンティン、クリソコーラ、グロツシユラーのことである。彼等は自らの体を植物と同化させることで、人が生きるには長すぎる時を過ごしているとされる。そのことについては68ページ以降の『人体と植物組織の融合』の章で詳しく述べることにする。

ラピスは驚いて、ついそのレポートの束を取り落としそうになった。3人の長老については予てから謎が多かった。母は詳しいことを幼かったラピスに教えるようとはしなかったし、ジェーダイトの住民にとっても3人の長老は神にも等しい存在だったので、彼等が一体何者であるのかなど軽々しく口にする者はなかった。

「……信じられない」

それは自然への冒瀆のような気がした。

人は自然から分化した存在である。隔離された固体へ自ら『進化』した以上、元の鞘に収まることは許されない。時間は一方通行なのだから。

「これは違う。違うわ」

何に対して違和感を覚えるのか、ラピスは鳥肌が立つほどの恐怖を感じた。飴細工の橋の上を鉛の靴で歩くような足元の不確かさが、レポートを握る掌を汗ばませる。

「父さん……」

ようやく口から零れたかすれた声は、珪砂を含んだようなきらめ

く風が溺め捕ってしまい、誰の耳にも届かなかった。

「4」

三章 再会

セピア色の写真を見つめながら、デイクソンは顎髭をさすり目を細めていた。写っているのは自分と、一組の若い男女。見る者に向けられたコスモスのようなさわやかな笑顔が、かすかな感傷を促す。「そろそろかの……」

失われた時は戻りはしない。かと言って過去を捨ててしまえるほどにデイクソンは若くはなかった。

「デクソンのおっちゃん、何がそろそろなんだ？」

デイクソンは答えの代わりに彼自身も問で返した。

「トルマリン、1つ頼まれてはくれんかね？」

濃密の瞳に疑問符を浮かべ、トルマリンはデイクソンの言葉の続きを待った。

「中央広場にある郵便局へ行き、私書箱の中身を受け取ってきてほしいのだ」

写真を机の上に置き、首にかけていた小さな革袋から小指ほどの大きさの鍵を取り出すデイクソン。157という数字が彫り込まれている以外には細工の全く施されていない実用的なそれをもう1度袋にしまい込み、彼はそれをトルマリンの首にかけた。

「番号は157じゃ。白い紙袋に包まれておる。よいか？」

「——わかった。大事な物なんだな」

初老の男はそんなトルマリンにっこりと笑いかけ、黒猫の頭を2、3度撫でてやった。

「じゃ、俺行ってくる」

意気込むトルマリン。すぐに駆け出して行った後ろ姿を見て、デイクソンは涙をこぼしそうになった。十数年前、共について行かなかったばかりに、自分はまだこんな所で燻っていなければならぬ。

「まあ、わしの役回りも捨てたもんじゃなかったがの」

ゴチャゴチャとした様々な発明品に目をやってから、デイクソンはもう1度写真の上に視線を落とした。そして部屋の中に充満している機械油の独特な匂いを胸一杯に吸い込み、そこで息を止めてからゆっくりゆっくりと肺の中身を慎重に吐き出した。

チリリイイイイン

目尻に滲んだ水分を指でぬぐい取っていた時、1階部分にある店の扉に仕掛けてある呼び鈴が客の訪れを知らせた。

「やれ、無粋な客じゃ」

古ぼけた写真を積み重ねてあった本と本の間挟み込み、デイクソンは客を迎えるために壁にかけてあった紺色のエプロンを身にまとった。

レンガを埋め込むことで平らに整備された道を、青年はオルターガゼルの手綱を引きながら中央広場に向かって歩いていった。通りには様々な様式の服を着た男や女が、何かしらの用事のためにそれぞれ忙しそうに東へ西へと歩いている。旅の服装に身を包んだその青年も、言ってみればそのうちの1人であった。だが、背に担いだ黒光りする筒状の砲は、それらの人々と彼の境目をきっちりと分断していた。

「ご主人様、今回私はつくづく呆れました」

溜め息さえ聞こえてきそうな呟きに、青年オリゴクレースはキョトンとした顔で「何故だ？」と聞き返した。

「……普通、初対面で砲なんかぶつかみません！いくら面倒な事がお嫌いと言えども、仕事を円滑に運ぶには、それなりに相手と意志の疎通を図るべきだっていつも注意してるじゃないですか。それをあんな、しかも相手は女の子なんですよ！」

焦げ茶色の瞳を燃え上がらせて、アウインはそれだけまくし立てるとブルルウと鼻を鳴らした。

「あの子は父親もいなくて、母親にも6年間も会ってないのに……」

かわいそうだと思わないんですか。昨日だって――」

「盗み聞きか。良い趣味でいらっしやることだ」

言ってしまった後、オリゴクレーヌはピクリと頬の筋肉が引きつるのを感じた。

「……盗み聞き？盗み聞きって一体何の事ですか。はっ……もしかして私が寝た後、ラピスさんにまた余計なことを言っただんですか！」
アウインは立ち止まってオリゴクレーヌの顔を覗き込んだ。青年はできるだけ平静な顔を保ったが、勘のいいガゼルは敏感に真実を嗅ぎわけた。

「言っただんですね？……まったく、いつまでたっても子供なんですから。そんなことだからお嫁さんが来ないんですよ！」

アウインのズケズケと核心をついてくる物言いを、オリゴクレーヌはうんざりした面持ちで聞き流していた。そして、一通りの説教が済むまで何か面白い物はないかと辺りを見回し……見知った顔を見つけた。

「おい、アウイン。あの子の連れは確か黒猫だったよな？」

説教を中断されて、少し不満そうにアウインはそれを肯定した。

「あそこにいるのは？」

オリゴクレーヌとアウインは実のところ道に迷っていた。様々なオルソニプターの舞うこのジェントル・ブリーズの街で、たった1機のそれを見つけることは容易でない。ただうろついていても仕方がないので、「中央広場に集まっている公共施設の役所の地図から工具店を割り出した方が効率がいい」とどちらともなく提案し、2人はここまで来たのだった。

「トルマリン君でしたっけ」

郵便局の扉を開けられずに四苦八苦している黒猫の後ろ姿は哀れなくらいに滑稽だった。オリゴクレーヌは後ろから扉を開けてやることにした。

「ほらよ」

「あ、どーも。おっちゃん、親切だな」

猫は笑いながら『親切なおっちゃん』を見上げた。

「『おっちゃん』って年かなあ、俺」

オリゴクレースは瞬時逃げ出そうとした猫の首根っこを捕まえ、自分の顔の前まで持ち上げた。

「離せっ」

トルマリンは散々もがいたが、如何せん猫の腕力はたかが知れていた。

「何故逃げようとする？」

カチャリ、と背中に背負った砲をわざとトルマリンの目につきやすい位置に持つてくる。猫は尻尾を膨らしながらも、髭を突っ張らせて答えた。

「だってあんたラピスの敵じゃないか」

「主人のためなら己の危険は顧みない、というわけか」

オリゴクレースは感心したように呟いたが、トルマリンはその言葉に大いに反感を持った。

「主人なんかじゃない。ラピスは俺の1番の友達だ！」

毛を逆立てる猫の様子に、青年の後ろにいたアウインは焦げ茶色の瞳を見開いた。

「俺は、俺はデボーテのおっちゃんと約束したんだ。ラピスを、守るって」

トルマリンの大音声に人垣ができつつあった。オリゴクレースはそれに気づくと、人目につかないように一旦そこから場所を移すことにした。

「ロサリーリース、お前に新たな仕事がある。もちろん、断りはしまいな？」

紙と紙を擦り合わせるような掠れた声の主の前で、1人の女性が膝を折り、頭を低く垂れていた。職業柄のため、その薄茶の細い髪は恐ろしく短い。頭髪と同じくらいに色素の薄い瞳を軽く伏せた彼女ロサリーリースは、下を向いたまま心の乱れが目の前の者達に知

れぬよう、細心の注意を払って肯定する言葉を述べた。

「よろしい。お前はそのため拾われたのだから」

先程の声とは別の声が付け加えて言った。ロサーリーブスの心に枷を付けるように。

「貴女について、妙な噂が流れています。それを信じるよりも私は今までの貴女の仕事の成果を重視しますが……不用意な行動は控えるように」

女性的なアクセントを持つ、もう一つの声が言った。

「仕事の内容を伝えよう」

「6、7年ほど前から追ってもらっている者の身内と思しき存在が判明した。名はデイクソンⅡCⅡジャスパー。湖の西方に位置するジェントル・ブリーズの街の片隅に住んでいる」

ロサーリーブスは咄嗟に顔を上げようとしたのを踏みとどまった。デイクソンⅡCⅡジャスパー。その名前が出ることを、今付き合いのある中で最も親しい女性が一番恐れていた。

「情報筋は『万能の書』の在かを探らせていた者達からのもの。ロサーリーブス、貴女は昔のように何も考えずに任務をこなさない」

突き放すようなその言葉の後のしばらくの沈黙は針の筵のように感じられた。

「お前の仕事はその男が持っていると思われる『万能の書』の奪還だ」

最初の声が告げた内容に、ロサーリーブスは初めて顔を上げた。緑に苔むした、圧倒的に太い木の幹が、上に下にと枝葉を伸ばしている。建築物はこの天井のない部屋を中心にセバスの都を形作っているのだ。樹齢千年に達するかと思われる3本の巨木。それこそがジェーダイトを統べる3人の長老達の真実の姿だった。

「必要あらば邪魔者は消せ。過去の失敗は繰り返すな」

左端にあつた楠の幹のコブが口を開く。よく見ればそこには退化し始めた目と鼻と口が申し訳程度に付着しているのがわかる。

「お前の行いは正しい。ゆめゆめ甘言に惑わされる事なきよう」

右端の桁の木も口を開いた。

「真実はいつも目に見えるものではありません。分かったのであれば下がちなさい」

最後に中央の杉の木が口を開いた。その瞳は他の2つの巨木に比べるとまだ若々しかった。深いところで光を発しているような翡翠の瞳は、ロサーリーブスの心の裏まですべて見通してしまいそうで、腋下に汗がにじんでくるのを彼女は感じた。

「あの時のような失敗は2度とは繰り返しません。再びの任務、速やかに実行致します」

ロサーリーブスはそう言って立ち上がると、一礼してクルリと踵を返した。背後から3つの大きな者達の視線を痛いほど受け、彼女は崩れ落ちそうになる全身を必死の思いで支えた。

しかし、女が去った後、桁の木が言った。

「グロツシユラー、お前は甘すぎる」

声は厳しく、非難に満ちていた。

「あの女は最早使えまい。あの態度を見ていれば分かる」
楠も言う。

「裏切り者には相応の罰を」

仲間に促されたが杉の大木はしばらくの間無言だった。が、

「分かりました。多数決により、彼女のオートマティック・コントロール化を行いましょう」

采配はロサーリーブスの努力も空しく、いともあっさりと下されたのだった。

髭をピンと張り、全身を緊張させた黒猫の前に、2人の男が対峙していた。年格好はまるきり違う。しかし、2人はどこかしら共通した空気を纏っていた。

「何だ、戻ってきおったのか」

最初に口を開いたのは口元に髭を蓄えた方の男だった。相変わらず山積みされたままの紙に埋もれながら、彼は目を片方だけ大きく

開き、相手の返答を待った。

「老けたな、親父」

久しぶりに再開した息子の開口一言目の言葉に、顔に皺を刻んだ年配の男は頬を引きつらせた。

「おかげさまでの。悪名の高いお前がわしの息子だと他人に知られたらと思うと白髪が増える一方じゃ」

壮年の男、ディクソンは家出同然に出て行つた息子を下から上へと眺めた。最早背は自分のそれをはるかに越えている。嬉しくもあり、寂しくもあるような感情が彼の胸を満たした。

「お前、ラピスを追って来たんじゃろ？」

「……まあな」

フイ、と他所を向くオリゴクレース。その様子を見て、ディクソンはからかうように笑った。

「ラピスはお前のことを忘れとる。間抜けな男じゃな」

「放つとけよ。そんなことより、彼女は？」

「口止めされての——と言いたところじゃが、教えんわけにはいかんだろう。あの娘だけではちと荷が重すぎる」

「荷ってなんだ？」

トルマリンは緊迫した空気が和んだのを感じて、率直な疑問を彼等に告げた。

「トルマリン、お前も此奴について行きなさい……荷とは運命のことじゃよ」

ディクソンの口にした答えが黒猫には分からなかった。けれどトルマリンは力強く頷いた。ラピスと一緒にいること。それは、彼の中で一番比重を占めていることだったので。

「運命なんてものを信じているから人生つまらなくなる。親父、自分がここにいてってことは自分で決めたことだろ？」

「生意気を言いおつて」

自分の元を離れた時、オリゴクレースは15になったばかりだった。体だけでなく、精神面でも少年は青年へと成長していた。

「ところで、それは何だ？」

オリゴクレースはトルマリンの持つ白い封筒を指さして言った。

「あるものの片割れさね。ありがとうよ、トルマリン。じゃが、悪いがそれはラピスに会ったら彼女に渡してくれんかの？」

「うん。わかった」

猫は頷こうとして首を硬直させた。夜鷹のような速さで、トルマリンの首筋をダーツの矢がかすめる。

「ウニヤッ」

矢の飛んで来た方に素早く向き直る黒猫。全身の毛を逆立て目にした相手は、身の丈が2 m程もある女だった。

「お前は……」

オリゴクレースも黒猫がそうしたように肩を怒らせた。階段に現れた女には見覚えがあった。長老達の隠密の1人だ。

「デイクソンⅡⅢジャスパーはお前か？」

簡易鎧を着た女は事務的に聴いた。

「わしじゃ。何のようかの？」

デイクソンは極力冷静であろうと努めた。

「万能の書はどこにある」

単刀直入な物言いは酷く機械的だった。呼吸はしていようが、女には屍のように生気がなかった。

「折角来てもらっておいて失礼だが、10年振の親子の再会なんだ。お引き取り願いたい」

オリゴクレースは椅子代わりにしていた本から立ち上がると、険しい顔をして言った。

「貴様は……オリゴクレースか。貴様とて主に仕える者だろう。邪魔をするな」

「するね。こいつは俺の親父だ。万能の書を親父が持つてるなら俺が長老達に届けてやる。だから手を出すな」

厳しい口調に、女は少しの間考えた。

「よかるう。ただし、約束を破れば次は容赦せん」

女はそう言うのと、現れたときと同じように唐突に姿を消した。

「親父、それは万能の書だな？」

オリゴクレースの言葉は確認のためのものだった。

「そうじゃ。だが、これだけでは全く意味をなさぬ」

デイクソンは黒猫から封筒を受け取ると、その中に入っているものを取り出した。

「ただの本じゃないか」

「うむ。歴史が綴られた何の変哲もない古書じゃ。じゃが……ここを見なさい」

デイクソンは本の最後のページを捲った。

「この本はまさしく鍵。人が空で生きるか地上で生きるかの最後のページにはこうあった。」

『この書を島の管理を行っている中央コンピューターに掲げよ。されば方舟は地上へと接舷を始めるであろう』

2人と1匹は無言でその文字を見つめ続けた。

静まり返った部屋の中で、戸棚に飾られた枯れた花だけが、音もなく向きを変えた。

「まったく……どうして私がこんな目に遭わなきゃなんないのよ！」

赤い屋根のログハウス裏の崖に、そんな叫び声と共に1基の薄いブルーの羽根を持つオルソニプターが帰来した。

「えっと、オリ、オリ……とにかくあのオリリ何とかって奴、今度会ったらただじゃ済まないっ」

翼の勢いを殺し、完全に地に足をつけると、少女は高く結い上げた栗色の髪を振り乱しながらゴーグルを首のところまで乱暴に引き下げ、オルソニプターの機体を裏口の柵に一時的に固定した。

「あんな大砲打ってくれちゃったせいで、パイプは外れるはバネの調子はおかしくなるは……もう最低」

口中で毒づきながらラピスは玄関の方へと急いだ。もちろん歩幅はいつもの1.5倍以上ある。先程彼女自身が口にした理由で、家

に帰るまでに費やした日数は、これまでにないほど長くかかってしまった。

「どうしていつもこうなのかなあ？行動を起こすたびに邪魔がはいる」

独り言が多いのを自覚しつつもラピスにはそれが押さえられなかった。

「そうなのよ。急いでもるときほど、邪魔が多くて嫌になるのよね」
ブツブツと呟きつつ、ラピスは玄関のところに回り込んだ。そして……玄関にある階段のところにいたモノを認識すると、とっさにそれを指さして叫んだ。

「あ、あんたはっ！」

「あ、ラピスさん。今お帰りですか？お久しぶりですね」

丁寧な言葉遣いで話しかけてきた相手をラピスは信じられない面持ちで凝視した。背に焦げ茶色の数条の模様を持つオールターガゼル。オリゴクレースの乗り物であった。

「どうしてあんたがここに？……ってことはあいつもっ！」

ラピスは止まりかけた足を再度玄関の方に向けた。1段飛ばしで階段を駆け上がり、木製のドアを手前に引く。鍵は開いていた。

「ラピスさんっ」

後ろからアウインが声をかけたが、ラピスはそれを聞かずにリビングの方へ進んでいった。

「……」

家の中は出掛けた時と大して変わりなかった。ただ、その中にある空気だけは違った。1週間放置された時のシンと床に沈殿した透明な静けさはそこにはなく、雑然とした雰囲気家が家中を支配していたのだ。

「……あいつっ」

ラピスは胸がむかつくを感じた。自分の大切にしている場所に、文字通り土足で踏み込んできた相手に対しての怒りは半端ではなかった。

「よお、遅かったな」

自分の部屋の扉を開けた時、それを待ち構えていたかのように男の声がした。低い、耳に心地よい声だ。半開きの扉は青年の顔を隠していたが、それがあの青年の声であることは間違えようもなかった。

「ラピスう、ごめん。こいつはその……」

オリゴクレースはラピスのベッドの縁に腰掛けていた。その足元のところに黒猫トルマリリンが黄色い瞳をつやつやと光らせて、懇願するようにラピスを見つめていた。

「トルマリリン、あんた……」

ラピスは苛立ちが体の中から溶け出して行くのを感じた。体一杯に膨らんだ怒りは、猫の瞳を見た瞬間から言いようのない他の感情に取って代わられていた。

「……どうしてあんたまでここにいるの？」

聞きたいことは3つあった。何故猫がここにいるのか。何故オリゴクレースと共にいるのか。何故デイクソンは約束を破ったのか

「ま、いろいろあってな。こちらにも聞きたいことがある。何故嘘をついた？」

オリゴクレースはラピスの問をうまくはぐらかすと、それまで浮かべていた軽い感じのする笑みを消した。金の瞳が鋭角的に光る。

「俺は商売品には傷1つ付けないようにしている。だから商品の運び方は相手を見て判断する。相手が反抗的であれば縄でふん縛るし、睡眠薬だつて盛る。ラピス、君には意志の同意を求めただけだ。何故だと思う？」

オリゴクレースはラピスの瞳をじっと見つめた。少女はその視線の強さにたじろぎ、フローリングの床の上に視線を移した。

「……それはそっちの都合だわ」

オリゴクレースはその言葉を聞いて眼の端だけで笑い、不精髭の生え始めた形のいい顎を撫でた。

「そうだな。確かにそうだ。だが、俺のナイーブな心はいたく傷つ

いた」

青年はそう言って立ち上がると、ラピスのすぐ前まで歩いた。

「マイナスを消すにはどうすればいいと思う？お嬢さん」

突然の問いかけに、ラピスは何を話しかけられたのか理解できなかった。間髪をいれず、青年はその答えを自ら口にした。

「プラスで補えばいい」

言いつつラピスの腰に腕を回すオリゴクレース。そのまま彼女を軽く抱き上げると、彼は少女の唇に自分のそれを重ねた。

「な、な、な、何すんだ！」

その行為にまず驚いたのは茫然自失の体のラピスよりもトルマリンの方だった。

「マイナスを補うだけのプラスをいただいただけさ」

臆面もなくそう言い切ると、頭の中が真っ白になっているらしいラピスをベッドに座らせて、オリゴクレースはテーブルの上に置きつ放しになっていた茶色の小包に手をかけた。「オカリナに封筒が1つか。中の便箋の一枚目は手紙、もう1枚は——なるほどね」

オリゴクレースは手早く中身を確認し、白紙の便箋をラピスが前にそうしたようにして調べた。それから、防水マツチの箱を懐から取り出し、その小さな炎で紙の表面をあぶり始めた。

「な、何してるのよ。燃やすつもり！？」

オリゴクレースが擦ったマツチの火薬の臭いで正気に戻ったラピスは、青年のやり始めたことを眼にしてそれを中止させようと彼の腕をつかんだ。

「そうだぞ。おまえ、勝手にそんなことすんな！」

トルマリンもラピスを援護するように青年の足をかみついた。が、

「……え？」

紙に浮かび上がってきた図柄が目に入り、ラピスは突っ掛かるのをやめた。そんな少女の様子に、黒猫の動きも止まる。

「これはセバス中枢を記した地図だ。……そうか、これが中央を統べるモノの在りかか」

オリゴクレースの納得したような声を聞いて、ラピスは青年の顔を見上げた。

「?」

一瞬のデジャヴ。同じことをいつかやったことがあったかのような、奇妙な感覚。けれど、それが何故引き起こされるのか、ラピスには全く思い出せなかった。

「何だ、俺の顔に何か書いてあるか?」

「言ってほしい?」

突き放すように言い、ラピスは窓の外に目をやった。視界一杯に続くなだらかな丘陵地帯。ここからこの景色を見るのはひよっとしたらこれが最後かもしれない、という予感が少女の脳裏にチラリとよぎった。

「5」

四章 首都セバス

セバスの都に入るための水上トレインは随時運行されている。千年前の知恵を応用した簡素なもので、引かれたレールの上と機体の間に磁力を通して磁界の方向に沿った動きをする乗り物だ。そのため、風車で作られる電気の一部はここに供給されていた。

石製アーチの数々が美しいジェントル・ブリーズの駅には、セバスへ発つ人、それを見送る人、セバスから街に訪れた人、駅員など様々な人々が年格好をした人間達が集まっていた。ただし、ここ1カ月は常のこの場所とは多少様相が違う。構内には特別配備の兵士の姿がちらほらと見られ、連結されている2両のトレインの4つの出入り口にはそれぞれ1人ずつ検問官の姿があった。もっとも、オリゴクレースを端とするアレスター（賞金稼ぎ）等は職業柄、自分の手形の他に、捕らえた人間と共にセバスに入るための免許を持っていた。

「よし。さつさと通れ」

検問官の男はオリゴクレースの顔を見るなりそう吐き捨てた。その男は目の前に立った青年が自分が逆立ちしようが到底かなわない相手だということを知っていた。

「ご苦労さん」

オリゴクレースは鼻歌を歌うようにして車内に乗り込んだ。大型トロツコに屋根をつけた、玩具のようなリリユート製のトレインには、検閲のためにあまり乗客はいないようである。

慣れていることなのか、青年の相棒であるところのアウインも特に表情を変えず、中型から大型の動物、又はそれぐらいの大きさの荷を積むための2両目の車両に乗るべく後方へ移動した。

「ラピスさん、オルソニプターは私が見ていますので心配ありませ

んよ」

他人の手によって翼が2両目に運ばれて行くのを不安げに見ていたラピスに、アウインが気を利かせてそう言った。

「ありがとう」

「ラピスう、俺も2両目に行く。アウイン1人じゃかわいそうだ」

足元に絡み付くように体をこすりつけ、黒猫は目を細めた。ラピスは腰を折って猫の頭をなでてやり「わかった」と答えた。

「上天秤（午前10時）の刻、セバス行きが発車いたします。ご利用されるお客様はお急ぎください」

流れてきたアナウンスにラピスは従った。

「これに乗るのは初めてか？」

オリゴクレースは乗客の少ない車内の1番出入り口に近い座席に腰掛け、羽織っていたマントを脱いだ。火薬の残り香がちらりとラピスの鼻孔をなでた。

「母さんは自分達がやろうとしていることを教えてくれなかった。だからもちろんセバスへは1度も行ったことがないし、これに乗るのも初めてよ」

カララアアアン

発車の合図の鐘が鳴り響き、機動音無く列車が動き始める。

窓から吹き込んで来る風にラピスは目を細めた。トレインはすぐに湖の上に達した。水上に浮かび、走って行くトレイン。水平に流れて行く変わり映えのない景色は、しかしラピスにとっては新鮮なものだった。

「飽きないか？」

外を眺める少女に、オリゴクレースは素直な問を發した。

「空を飛んでいるときは視点がコロコロ変わるの。真上から見ていたと思っただけもう見上げている感じ。ずっと何かを吸い込むような音が耳の側で聞こえて、風が光の斜線を描いているのが見える。でも、飛んでいるときは案外冷静に物事を判断できるわ」

ラピスは言葉が足りないような気がして、さらに付け加えた。

「今はもつと体の中が空白な感じがする。これは速いけど、ずっと遠くの方はゆつくりと見ることができるから」

「なるほど、確かに。俺もアウインの背に乗っているとき感じるのはあいつが土を蹴る振動、その体温や鼻息、一瞬一瞬の景色だけだ」

ラピスは頷き、続けた。

「でも、そういうものって失いたくないものだと思わない？」

ラピスは湖の青よりも一層深い碧をたたえた瞳でオリゴクレースを覗き込んだ。

「そうだな」

オリゴクレースは予感した。それが何の予感かは分からない。静かな湖面に水滴を1つ落とされたような——けれど、それは体の隅々まで波紋を描いた。

「失いたくないのよ、何も」

呟いた少女の小さな肩は小刻みに揺れていた。オリゴクレー스는それに気づくと小さく溜め息を吐いた。顔を上げ、気丈に肩を張って生きてきたのであろう少女を、抱き寄せたい衝動に駆られた。

「失うときにそれにしがみつかなければいいんだ。失ったモノを後生大事にするから、人は不幸になる。君の母親のようにな」

「母さんは不幸なんかじゃないわ、きっと」

景色から青年に視線を移し、ラピスはそう口にした。不思議と心は凪いでいた。

「客観的に人の幸せなんて測れないもの」

再び窓の外に視線を移したラピスの姿にモルチエの面影が重なる。オリゴクレー스는開きかけた口を閉じた。幼かった苗は、既に支え棒を必要としないくらいに成長していたのだ。

青年は少女の風になびく髪を見つめた。柔らかそうな栗色の髪は、日の光に透けて明るいい色に染まっている。

「変わらないな」

俺のことは忘れてしまっているようだが――

声には出さずに呟いた言葉を、オリゴクレースは硝子の花を抱き締めるように胸に秘めた。

部屋は静まり返っていた。いや、音はあった。枝の成長する、古い樹幹を裂く音。部屋に汲み上げられている水の揺れる、気泡の弾ける音。天窓から吹き込んでくる穏やかな風が枝葉を擦り抜ける音――

「もう、時間なのね」

人のいないその空間に、独り言がこだます。その声音は諦観にあふれていた。

「私はいつまでもつかしら」

楠も栃の木も無言だった。返る答えを期待していた訳ではなかったが、杉は落胆に胸が痛むのをこらえられなかった。

「7000年以上生きるという縄文杉……二ホンという国だったかしら。それを見たのは」

記憶は限りなく曖昧だった。杉にはそれが怖かった。

「サーペンティン、クリソコーラ。私、少し気弱になっているわね」千年の時を経、植物体と哺乳類としての能力を共に受け継いだ彼女等には、それだけの負荷がかかっていた。

しかし、それもまた計算された事態の1つ――人の脳は心臓よりも圧倒的に長寿だが、千年を過ごすには短命すぎる。例えば植物として何千年生きられるとしても、人間としての意識を保ち続けることは不可能だった。

「駄目よ。私は最後の責任者、グロッシユラー……時が来るまでこの方舟は落とすわけにはいかないもの」

自らを鼓舞するように、杉はそれまで綴じていた目を開いた。日光が矢となって瞳を射たが、眩しくはないのか目を細めることはしなかった。

「そのための犠牲は厭わないわ」

翡翠の瞳には決意の閃きがあった。

ロサーリースがモルチエを連れてセバスに都入りを果たしたことは、3人の長老達が養っていた孤児（成人の後は隠密として働かされる）の間に砂地に落とした水のように広がった。彼等はロサーリースを褒めたたえ、尊敬し、あるいは嫉妬し、羨望した。彼等にとってみれば3人の長は親にも等しく、長達に絶対服従することは最大の孝行とされ、主人に認められることが彼等にとっての最大の幸福だったからである。

「……裏切られることは、何故こんなに辛いのかしらね」

モルチエはゆっくりと天井を仰いだ。随分の間使われていなかったのか、クモの巣は既に埃を被り、幾本のツララになって垂れ下がっている。採光のための窓は神のいる場所と等しい所にあるようだった。

「ロサーリース、貴女は変わったわ」

それとも……とモルチエは服の裾を強く握り締めた。

「変えられてしまったの？あの動物達のように——私のせいで」

風化した埃の臭いが、モルチエの体に浸透してゆく。蓄積された虚無感、彼女の存在意義を容易く破壊した。

「間違いだったの？……ねえ、教えて。貴方、デボータ……私は間違っていたの？教えて……貴方……」

年を取ることのないデボータの面影が脳裏にフィードバックする。モルチエは声を押し殺して泣いた。もう1度声が聞きたかった。もう1度笑いかけてほしかった。……もう1度触れたかった。顔に、髪に、肌に、手に、唇に——

「夢見たものは失われる……私にはもう何も無い……こんな結果を望んでいたわけじゃないのに……」

嗚咽はそれ以上の言を許さなかった。助けの来ることのない地下牢で、女はただ無力感に打ちひしがれていた。

首都セバスの街は3重構造になっている。1番上になる層は2階

に、中間層は1階部分、最下層は地下1階に相当する。街全体が中央に向かって窪んでいるという地理上、棚のように街を3段に分け、居住区を仕切る方が街としても都合が良かったからである。

「さあ、着いたぞ」

水上トレインから降りながらオリゴクレースは切り出した。

「あそこにある緑の塊が何か分かるか？」

言って指さすオリゴクレース。ラピスは素直に青年の指し示した方に視線を馳せた。

「……木？つて、まさかあれが——」

だとしたら相当大的なものであることは間違いなかった。建物の天井部位から枝があふれ出し、それでもまだ太陽の方へ手を伸ばさうとしている。うねるような生命力が、遠目からも感じられた。

「そうだ、あれが長老達だ。君はあれらと対峙することになるだろう。それでも行くか？」

「当然よ。私にも聞きたいことがあるもの」

即答したラピスをオリゴクレースは見つめた。少女は何だか居心地が悪くなって、フィツとよそを向いた。

「そう言うと思った。仕方ない。危なくなったら俺が助けてやるよ」

「あんたには関係ないでしょう？仕事はどうするのよ」

心の底では嬉しかったのだが、如何せん、それを素直に受け入れるには少女はまだ幼かった。

「俺は自分のやりたいことをやるだけさ。仕事などいくらでも見つけられる。俺を利用しろよ」

視線がかちあう。今度はラピスも視線を外すことができなかった。息を潜めたまま、相手をみつめる。

「ラピスッ、ラピスウウ。これ、いいなっ。オルソニプターやめて、これにしないか？」

そんな2人にはお構いなく、トルマリンはすっかりはしゃいだ様子で2両目から降りてきた。後ろから折り疊んだオルソニプターを背に乗せたアウインが姿を現す。

「却下」

少し焦った様子で少女はパツと猫の方を向いた。それから一言の元にトルマリンの提案を否定し、ラピスはアウインの方へ近寄った。「ありがとう。後は私が運ぶから」

金属の骨組みをすぐに使えるように組立て、皺ができないように布を張り直すと、ラピスはそれを肩に背負った。細かく分解する必要があるとき以外は、極力ポールは外さないようにしている。習慣になると、ポールを接合しているキャップの凹凸が摩耗し、抜け易くなってしまうからだ。

「で、あそこへはどうやって？」

ラピスが問う。オリゴクレースは再び顔を隠すようにしてマントを羽織ると、鉄の筒を背負い直した。

「今何時だ？」

懷から父の形見を取り出すと、ラピスは懷中時計の貝のような蓋開けた。

「下山羊（午後１時）の１７分くらい。それがどうかしたの？」

「あと約４０分か……まだ時間があるな。ま、そうせかさず飯でも食おう」

オリゴクレースはそう言ってトルマリンを抱き上げると、アウインの上に猫をチョコンと乗せた。

「お前はここな」

朗らかに笑う精悍な青年。ラピスはその様子に言い知れない懐かしさを感じて、顎から首筋にかけてのラインをじつと見つめた。太陽光に縁取られて、髪も瞳も産毛さえも金に輝いているオリゴクレース。

——オリゴクレースの別名、知ってるか？サンスターン。太陽の石って意味があるんだぜ——

記憶の断片が甦る。けれど、それは流れ星のように一瞬だけラピスの脳裏をよぎっただけで、すぐに情動の海の中へ沈んでいった。「どうした、行くぞ？」

先を歩き始めていた青年が振り返る。ラピスは今日覚めたように
瞼を瞬かせると「わかってる」と答えながら彼等の元に駆け寄った。

——太陽っていいと思わないか？強くて暖かくって。な、ラピス

少女の無意識下で少年が悪戯っぽく笑った。けれど、ラピスには
その声の主の顔までは思い出せなかった。

「6」

五章 紺碧

10年前、少女には父がなかった。

10年前、少年には母がなかった。

研究を続ける男に嫁いだ女は、夫が首都にいる間、娘を育てることに専念した。

病弱な女を娶った男は、妻に先立たれた後、後妻を入れることはなかった。

少女の母は少年の父の知人であった。それゆえ、少女と少年は何度か顔を合わせるようになった。

2人は肩を並べて様々なことを学んだ。それはほんのわずかな間だったが、2人に片親がない淋しさを紛らわせた。

共に過ごした数週間の日々。それが現実であったのかそうでなかったのか——それらの記憶は新しい記憶に追いやられ、薄れ行く虹のような輪郭だけを彼等の上に残した。

当時、少女は7歳だった。

当時、少年は15歳だった。

外では雨が降り出していた。否、雨という名は借り物だった。ジエーダイトの大地を覆う植物群に定期的に水をまくために、自動散水機は巨大な気囊部分の随所に設けられている。それが作動したに過ぎなかった。

雨音は彼女等にはかなり遠くの方で聞こえていた。建物全体が切り出した石で作られているからであろう。

青年の横にガゼルの姿はなかった。アウインは入り口の所で退路を確保しているのだ。

「ねえ、本当にこつちでいいの？」

「間違いないはずだ」

根拠もなく自信ありげに答えるオリゴクレースを尻目に、ラピスはホウツと息を吐いた。青年が告げた謁見の時間はとうに過ぎている。長達の宮殿は深部を除いては1日に1時間だけ一般に門戸が開かれていた。警備の薄くなるこの時間帯を、オリゴクレースが見逃すはずがなかった。

「……なあ、ラピス。こっちからモルチェのおばちゃんの匂いがするんだけど」

天井の高い宮殿内は恐ろしくだだっ広い。しかし、人気があまりないのでその分、人の匂いは残留していた。

「母さんの？」

悪い予感ほどよく当たる。ラピスは体の内からくる震えを何とか押さえようとして、自分の腕を服の上からギュツと握った。

「血の匂いもする……この匂い、あいつだ」

トルマリンはそう言うのと、犬のように床に鼻を擦り付けてその出所を探った。

オリゴクレースとラピスは、そんな黒猫に無言で付き従った。

「——こんなところで何をやっている」

その声が聞こえたのは、地下への階段を丁度トルマリンが探し当てた時だった。

「ロサーリーブスカ」

オリゴクレースは振り返りざまに飛んで来た矢を、素手で受け止めた。避けることもできたが、そうすればラピスに当たっていただろう。

「ラピス、あいつっ」

トルマリンの瞳が金に光る。小さな体も2、3倍くらいに膨れ上がった。

「お前がラピスⅡCⅡラズリか。遅かったな。お前の母親は先程死んだぞ？」

悪意でもあるのか、女は整い過ぎた顔に笑みさえ浮かべていた。

「お前が殺したんだな!？」

「トルマリッ!」

黒猫は女に飛びかかった。あまりにも無謀すぎるその構図に、ラピスは猫の名を思いっきり叫んだ。が、

「フン」

冷やかにロサーリースは猫を見下し、その小さな体に容赦なくダーツの矢を突き刺した。

「フギヤッ」

ことん、と猫は床に落ちた。背に、腹に、鮮血が滲む。流れる、命の源。

「トルマリッ、嘘はよしなさいよ……」

膝が震えて、動くことすらままならない。

トルマリッは大きな瞳を自らの名を呼ぶ人の方へ向けた。

「ラ、ピスう、俺……あ、デクソンの、おっちゃん……頼まれた」

死に間際の猫の瞳は、寒気がするほど澄んでいた。ラピスは衝かれたようにトルマリッに駆け寄ろうとした。が、

「お前までああなるつもりか？」

オリゴクレースの腕がそれを阻んだ。その腕にも赤い染みがあるのを見て、ラピスは再び動くことができなくなった。自分は守られることしかできなかったのだ。

「違法に脳移植されて生きていた者にふさわしい最期だ」

脳移植という聞き馴れない言葉に疑問をもつ余裕はラピスにはなかった。彼女はロサーリースを睨んだ。他人をこれほどまでに憎んだのは初めてだった。けれど、睨みつけているうちに女の瞳がうつすらと涙ぐんでいることに気が付き、少女は唇をかった。それは自らに与えられた仕事だけをこなす、口を利く生物達と寸分違わぬ目だった。生気の抜けた死者の目だった。

「ラピス、合図したら床に伏せる」

オリゴクレースはそんなラピスの耳元で囁いた。

「階段とあの女の対角線上に、油圧をコントロールするためのチューブがあるのが分かるだろ？」

ラピスは目線だけ動かしてそれを見た。

「あそこを狙う……やるぞ」

オリゴクレースは一呼吸置くと、ラピスの肩にポンと手を置いた。瞬間、ボムツと火薬の発火する音が目をつんざいた。ラピスは言われた通りに素早く床に身を伏せた。

そして、轟音。鉄球は正確にチューブにめり込み、あふれ出た油は飛び散った火花で引火した。紅蓮の炎が天井へ向けて一気に吹き上がる。火は、チューブを伝ってすぐに建物の彼方此方へ腕を伸ばした。

「ねえ、ちょっと。あんたまで……私を一人にしないでよ……」

爆風の衝撃に倒れ込んだオリゴクレースに、ラピスは慌てて駆け寄った。

「フン、俺は太陽を名前に背負ってる。これしきの炎ではくたばらん」

青年はラピスの声を聞くと、素早くその身を起こした。

「……太陽？」

体の奥底で何かが閃いた。

「オリゴクレースの別名にサNSTOINってのがある」

「あ……」

ラピスには1つだけ不思議なことがあった。それはトルマリンと同じようにオリゴクレースという人間が憎めないということだった。考えてみればその兆候は随分前からあった。それが何故なのか分からなかったが、

「……オリゴ、クレース……？」

今ようやく分かった。

ラピスは顔を上げると、顔をススだらけにして前をギツとねめつけている青年の背中を見つめた。

「初めて名前を呼んだな、ラピス」

片手を失いつつも、無表情なまま立ち上がろうとしているロサーリースから少しだけ視線を外し、オリゴクレースは口の端でニッと笑った。

「行け。行って自分のしたいようにしろ」

言いながら、青年は懷から白い封筒に包まれたものを出し、それをラピスに渡した。

「トルマリリンが君に渡そうとしていたものだ。持っていけ」

「うん……」

ラピスは染みの多くなつた封筒を大切に受け取った。それからオリゴクレースに後を任せると、まだ火の手の届かない、闇の深部へ向けて走りだした。

少女は無闇にだだっ広いホールの中を壁沿いに進んでいった。部屋の中は水と土と木の匂いが充満していた。

「ここね……」

不安げにラピスは妙に凸凹とした壁にそつと触れた。

ピュイイイイイン――

「えっ……？」

掌に静電気がさつと走り抜け、ラピスは驚いて壁から手を放した。壁は見上げるばかりの巨大なスクリーンとなり、いやに目に食い込んでくる光を発していた。

『ディスクをセットしてください』

合成された耳障りな声がラピスに次の行動を促す。

「ディスク？」

『彩光を放つ直径12cmの円盤です』

コンピューターに指摘され、ラピスは自分の抱えている白い封筒に視線を移した。それはトルマリリンが最期に残したものだつた。

ラピスは無言で袋の口を開けた。中から出てきたものは、1冊の古びた本だつた。

『それはディスクではありません。ですが万能の書をお持ちとなれ

ば私は貴女に見せなければならぬものがあります』

コンピューターはそれ以上何も話さなくなった。その代わりに機械の作動音が断続的に続き、やがてその音すらハタリと途絶えた。画面一杯にあるものが映し出される。

「これは……」

ラピスは目の表面が熱い膜に覆われてゆくのを感じた。全身が痛いほどにしびれていた。こんなに青く美しいものをラピスは今まで見たことがなかった。それは1つの純粋な塊だった。暗闇の中、それだけが存在を主張する生き物だった。

少女はコンピューターの画面に震える右手を近づけた。しかし、過去の遺物は彼女がそうするよりも早く、静かにその輝きを失っていた。

「——時が来たようですね」

春の日差しのように柔らかい声が頭上から降ってきた時、ラピスはいまだ衝撃から立ち直れないでいた。

「それはかつての地球の姿です」

少女はハツとして辺りを見回した。じつと目を凝らすと、闇の中にヌラリとした巨木の影がホール中央に浮かび上がって見えた。

「やがてこの浮き島は地上に接舷するでしょう。この方舟は役目を終えたのです」

息を呑む少女には構わず、声は話を続けた。それは安堵と疲労に彩られた声だった。

ラピスは恐る恐る3本の樹幹の方へ近づいていった。大人が何人腕を広げれば事足りるのか、ふとそんなことを考えてしまうほどに太い幹は、生きた年数だけ黒々としなやかな獣のように伸びていた。

「……箱舟？」

「そう。全ては千年前からの計画の一端でしかないわ。一度壊れたものを修繕するのは時間がかかるの。それでも人々は地上を目指す。そんなことはわかっていたけれど、人が下で国を開くにはまだ地球は幼かったわ。自然に星が回復するのを待たなければならなかった。

本当にこの地球を救おうと思っっているなら植物だけを育てても無駄だということは、身に染みていたから」

杉の木、グロッシユラーは全てを吐き出すように淡々と言葉を紡いだ。何故か、それをこの少女に聞いてもらいたかった。彼女の瞳の色があまりにもこの星の色に似ていたからかもしれない。

「あんたは父さんを殺した。母さんも、トルマリンも」

ラピスの体の中で嵐が吹き荒れていた。感情が高まり過ぎて、自分でも何を言っているのか彼女には分からなかった。

「私は怒ってるのよ！？緑なんて大嫌い。地球なんて……うっん、違う。嫌いじゃない。好きだから嫌いな。好きなのに……トルマリンを奪った……」

木はもはや自由に動かすことのできない顔に、うつすらと表情を浮かべた。その顔は、千年分の哀しみに縁取られたものだった。

「私には謝ることができません。私達にはやらなければならないことがあったから」

とつとつと噛み締めるようにして、杉の大樹は冷たい吐息を吐いた。

「人の心に大地を愛する心を育てなければならなかったのです。千年前のように地上を見限った人達のあふれたままでは自然は残るはずがなかったから」

「そんなの、違う。だったら何故あんたはそんな格好してるのよ！人工的に体を変えたりして……あんたは正しい行いしてるつもりかもしれない。でも、そんなのただのエゴじゃない！」

口からほとばしる思いは、父にも母にも向けた言葉だった。

「貴女は若いわ」

知らないということは幸せなことなのね、と木は続けた。中傷ではなく、羨望として。少女に言われた言葉は他の者からも何度も聞いたことがあった。けれど、これだけその言葉を新鮮に受け入れられたのはこれが初めてだった。

「何故わからないの？そんなことを聞くために私はここに来たんじ

やないっ……」

硝煙のきな臭い匂いが漂い始め、時間に余裕がないことを告げる。ラピスはグロッシユラーのライムの瞳を真っ向から見つめた。

「何もかも知ってるようなふりをして、すべて1人で背負わないで。あんたは助けを求めるだけでよかったのよ……もつと違ったやり方だっであつたはずだわ」

グロッシユラーは肩の力が抜けたような気がした。樹皮が厚くなり年輪を重ねた分だけ、木の方が人間のときよりも肩をこるのかもしれない。思つて彼女は胸中で笑った。

「そうかも知れない。でも、私達はこの体を選んだ時点で道を決めた。命の全てをこの計画に捧げることを。全ては起こるべくして起きたのよ」

ラピスはいたたまれなくなつて、杉の幹を抱きしめた。グロッシユラーの生き方が切なかつた。彼女もまた、大切なものを守るために生きてきただけなのだ。

「……地球はあんたのことを見ていたと思つ」

グロッシユラーの全身に震えが駆け巡つた。救われたと思つた。

この少女が生まれたのが奇跡だと言われても信じることができそうな気がする。もう何年も笑い方さえ忘れていた自分に、安らぎを与えてくれた――

「もう行きなさい。ここもじき、火に巻き込まれるでしょう」

少女を死なせたくなくなつた。

「嫌よ！だつてあんたは……」

ラピスはそう叫んで巨木の幹にすがりついた。けれど彼女には分かっていた。しっかりと根を張つた杉の木を助けることなど、到底できるはずがないことを。わかつていても胸が痛かつた。グロッシユラーが例え両親や親友を奪つた相手だとしても、その心に触れた以上、冷淡に見捨てることはできなかったのだ。心が消化不良を起こし、苦しさに胸を掻き毟りたかつた。

「……帰りなさい。ここは貴女のいるべき所ではないわ。ここは私

達3人の長老の部屋。部外者は直ちに立ち去るべき神聖な場所よ」
グロッシユラーは義務的な声でそう言い、涸れて動かなくなっていた、元は腕であったはずの枝を無理に動かしてラピスの体突き放した。

「っ……」

「出て行きなさい」

厳しい瞳には有無を言わせない力があつた。ラピスはそれ以上何も言えずに、踵を返して走り始めた。

「……さようなら」

1人になった木はゆつくりと瞳を綴じて呟いた。芽吹いたばかりの若葉のような感受性を持つ少女。彼女が、引き渡されたこの世界をどう変容させて行くのか、それを見届けられないのが木には少し残念だった。

枯死した体の先端部分に炎が灯るのが分かる。枝に死の吐息が吹きかかるのが……分かる。

「ようやく、休むことが、できるわ。サーペン、ティン、クリソ、コーラ……」

それでも、穏やかな終わりを迎えられた分、自分は彼等より幸せなのかもしれない。

「プログラム、終了。これよ、り先、の、追隨は、許、しま、せん……」

最期の力を振り絞り、木はコンピューターに最期の命令をした。ピッ、と壁が機械音を発する。

『了解。接舷を開始いたします』

「行こう」

ロサーリースと決着が着いたのか、オリゴクレースは中央ホールの出口のところでラピスを待っていた。

「ねえ……どうしてみんな、死んでいくの？」

オリゴクレースはラピスの腕を引いた。少女は泣きそうな表情を

していた。

「死がなければ生にも意味はない」

「でも！」

こらえていたものが、頬の上を滑り落ちた。泣けば全てが現実だと知らしめられてしまうような気がして、けれど涙を止めることはできなかった。

オリゴクレースは無言で少女を抱き寄せた。ラピスの背負うオルソニプターの羽根が邪魔になって強く抱き締められないのが、青年にはもどかしかった。

「ご主人様っ、ここにいたんですね。さあ、お乗りください」

オリゴクレースがラピスの涙を唇でそっと吸い取ろうとした丁度その時、オルターガゼルが炎の中から姿を現した。艶やかだった毛並みは火の粉に焼かれ、見るも無残な体を晒して。

「お前……その体……」

「早く乗ってください。時間がありません」

アウインの声には危機迫るものがあつた。その声の調子に押されてオリゴクレースは頷くとガゼルの背に乗り、ラピスを後ろに乗せて自分に捕まらせた。

「振り落とされないようにしてくださいね」

アウインは突風の勢いで炎の中を走った。内側に曲線を描く2つの角を持つその生き物は、筋肉の筋がうつすらと浮き上がった4本の足で土を蹴り飛ばしながら前方へと視界を切り裂いてゆく。

「アウイン、とばし過ぎだっ」

オリゴクレースはアウインの意図するところを悟って手綱を引こうと身を起こした。金の髪は炎の照り返しを受けて砂金を飛ばしているように光を反射する。

「やめてください！……確かに私はオルター・シリーズの乗り物に過ぎません。本来は与えられた仕事に関する事項の思考しかできない生態ロボットです」

ですが、とアウインは続けた。

「私にはバグがあつたようです。私は私の意志を貫きたいと思います。今更『ご主人様』という呼び方を変えることはできませんが」

オリゴクレースにはアウインの決意を曲げることはできなかった。

「……アウイン……」

「先程、中枢から私の機械である部分に指示が来しました。これからのために私達のような半端者は要らないのだそうです。どのみち、死ぬなら私は私の好きなようにしたい」

階段を駆け上がり、灼熱した床を踏み碎きながら、ガゼルは前進する。ラピスは「もうやめて」と言いたかった。けれど、皮膚が焼けただれ、汗さえもかくことさえもできなくなっているガゼルの体は火がついたように熱かったので、そんな安易な言葉は口にできなかった。

「ラピスさんには翼がありますね？すみませんが外に出たらそれで上空へ逃げてください。私は真つすぐに駅へ向かいます。そろそろ、限界のようですから」

「……わかつたわ」

命は見せかけではなく失われてゆく。嫌だとしがみついても生きて。共に生きていきたい。願いはただそれだけなのに。

「ご主人様をよろしく頼みます、ラピスさん」

涙を飲み込み、ラピスはオルソニプターの羽を開いた。外門から青い空が除いているのが見え、そして

「……テイク、オフッ」

オリゴクレースの体を離す。体が宙に浮いたと思った瞬間、翼が羽ばたいた。サアツと風が彼女の中を通り過ぎる。何もかも洗い流すように。と、その時、

——俺、ここにいろよ——

声が……聞こえた。空耳かも知れなかった。けれど、ラピスはそれがトルマリンのものだと思わなかった。

——失ったと思わないで。得たものだってあるはずよ、ラピス——
今度は母の声。

——皆、地球に記憶されている。失われた訳ではないよ——

「父……さん？」

——さあ、お行き。彼が待っている——

ラピスは空との一体感の意味が分かったような気がした。全て、記憶されているのだ。空には、何もかもが。

ラピスは無言で頷いた。

そう、全てを失った訳ではない。

少女はガゼルの後を追った。黒い噴煙を上げる廃墟を振り返るところはしなかった。

エピローグ

オカリナの音が、大地の全てを魅了するように高く低く響き渡る。さわさわと大地を渡る緑の波。成熟しきらない青々とした麦畑の途切れた岩の上に、栗色の髪の少年の姿があった。

「上手いもんだ。あいつじゃそうは吹けない」

岩の下で絵を描いていた父親らしき男が、少年に話しかける。

「父ちゃん、そんなこと行っているのか？俺、母ちゃんに言い付けるぞ？」

「トルマリン、俺はお前を褒めたんだぞ？それはあまりにも酷い」
肩をすくめる男に、少年は笑いかけた。

「嘘だよ。人が気持ち良くオカリナ吹いてたのに邪魔してくれたことのささやかなお返しさつ。さーてと、今度は邪魔すんなよ」

生意気な口をきく金の瞳の少年。男は苦笑しながら自分もキャンバスに向き直った。

再び、オカリナの音が風に染み込んでゆく。記憶を運ぶように。様々なものの達の魂を揺さぶって。

——な、ラピス。俺、ここにいるよ?——

幾つもの囁き声の縋り合わさった笛の音から、綻びたように言葉が1つ、風に洩れた。

(END)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0472e/>

BlueStone

2011年7月20日03時31分発行